



対話での問いかけ

新学習指導要領の実施を半年後に控えた多くの高校で、カリキュラムの検討が進んでいます。一方でいざカリキュラムを検討する際には、検討指針が曖昧な場合や、何をもって良いカリキュラムとするか明確でない場合も少なくありません。そこで対話では、下記の問いかけを基に、参加者が考えを深めました。

カリキュラムを作るうえでの指針は何か？ つくるカリキュラムで何をを目指すのか？

良いカリキュラムを作る学校は、どのように組織運営しているか？

実施したカリキュラム自体の評価をどのように行うか？

テーマ設定 背景

カリキュラムの見直しと称して「育てたい生徒像や育みたい資質・能力の再定義」「授業や行事のあり方の見直し」を進める学校を多く見かけるようになりました。一方で、現実的に実践できるカリキュラムは各校の理念、置かれている環境、使えるリソース等の影響を大きく受けます。そこで今回はテーマを「特色あるカリキュラム作り」とし、検討のポイントや留意すべきことについて、対話を進めました。

話題提供 - 南郷 市兵 先生 (福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校) - *ループリックはこちら

- ・震災を経て、変革者の育成を目指し誕生した学校。変革者とは何かを問い、カリキュラムに反映してきた。
- ・生徒の成長を表現しているのはループリック*。生徒と照らし合わせて違和感があればすぐ修正している。
- ・卒業時アンケート「社会との関わりを見出した」「自分の価値観を考えることに繋がった」を注視している。
- ・組織作りにはルール・ロール・ツールが必要。例えばロールは、進路・教務と別に研究企画部を置いている。
- ・教科横断はさらに強めたい。各教科と探究で目指すことを生徒が別物と感じない組織的工夫が必要。

話題提供 資料(一部ご紹介)

ふたば未来学園の目指すもの(2) 人材育成要件・ループリック					2021.4.5改訂Ver.				
要件	ループリック								
社会貢献	社会貢献(ボランティア活動、社会奉仕活動、社会貢献活動等)を通じて、社会に貢献する力を育成する。								
探究学習	探究学習を通じて、自ら課題を設定し、解決策を模索する力を育成する。								
国際理解	国際理解を通じて、異文化を尊重し、グローバルな視点で課題を解決する力を育成する。								
キャリア教育	キャリア教育を通じて、自己理解を深め、進路選択の力を育成する。								

生徒たちの成長 地域・社会に貢献する明確な目的意識

本校での学びを通じて社会や地域とどう関わって生きていくかを見出した生徒が9割に。

卒業時アンケート(本校の学びと生き方への接続)

Q. 社会とどう関わっていくかを見出した **88%**

大きく影響した(繋がった・活用した)	31.3	57.1	10.7	0.9
ある程度影響した(繋がった・活用した)				
あまり影響しなかった(繋がらなかった・活用しなかった)				
全く影響しなかった(繋がらなかった・活用しなかった)				

※調査期間(令和3年3月卒業)本校生113名、令和3年2月28日調査

■ 4 大きく影響した(繋がった・活用した)
 ■ 3 ある程度影響した(繋がった・活用した)
 ■ 2 あまり影響しなかった(繋がらなかった・活用しなかった)
 □ 1 全く影響しなかった(繋がらなかった・活用しなかった)

比較 日本財団 世界の18歳意識調査の日本の結果(2019年実施)

自分は責任がある社会の一員だと思う	44.8%
自分の国に解決したい社会課題がある	46.4%

対話の声

- ・ループリックから理想の生徒像が滲み出ている。自校が目指す成長をもっと明確化したい。(北海道)
- ・ループリックの段階で、質的に違うことが分かるのが素晴らしい(複数)
- ・教科学習と探究学習が分断しない工夫を考えたい。繋がりが無いと生徒は別個に捉えて混乱する。(宮城)
- ・教科横断は出来ないことはない。でも形だけ横断している感じになりがち。何が重要だろうか?(神奈川)

本プロジェクトへの「ご参加希望」「校内での対話型研修会のご要望」等は、運営事務局 ベネッセ教育総合研究所 次世代の学び研究室(nextlearning@mail.benesse.co.jp)までご連絡ください。

本プロジェクトは、新型コロナウイルスの影響により全国の学校が休校せざるをえなかったことをきっかけに、有志により発足されました。プロジェクトでは、毎週行う学校教育活動に関する対話を通じて、「学校教育の革新と、生徒の気づきと学びの最大化」を目指しています。これまでに全国約100校から主に中高教員が参画しています。対話履歴はSNSでも発信しています。フォローください。[Twitter](#) [Facebook](#)

対話を振り返って

北海道旭川東高等学校 松井恵一

毎週の「対話」により、皆さんから多くの刺激と気づき、そして何とも言いがたい良い意味でのもやもやとした想いをいただいています。最近、次年度からの新課程の実施に向けて、グランドデザインの再設定やそれに基づくカリキュラム編成、観点別評価、ICTの導入など課題が山積みで、一つ進めば、また一つ後退といった状況にあり、迫り来る次年度に向けて、多くの糸が絡まっているような状況に陥っていました。このような中で、今回の南郷市兵副校長先生の話提供、そして、参加された先生との対話は、絡まった糸のほどき目が見えた大切な時間となりました。

南郷先生の話提供においては、大きく2点についてはっとさせられる視点をいただきました。一つ目に、目的意識の「共有化と柔軟性」についてです。全教職員で育てていく力を設定し、人材育成要件として詳細なルーブリックにまとめ、個人主義になりがちな教職員の意識を統合すると同時に、生徒たちともその内容を共有するあり方、そして「違和感」を感じたときにその内容を修正するという柔軟さは、変化する社会の中での学校の姿勢を再認識するものとなりました。学校は、ややもすれば「伝統」という外面的な言葉に引きずられて変化を受け入れることができず、時代や社会の変化と乖離した状況に陥りがちです。このような中で、当然のように教員も生徒も時間と共に入れ替わりを伴う中で、設定した「目的意識」は形骸化してしまいます。「違和感」を良い意味で受け入れ修正していくあり方は、変化の大きな今という時代に立ち向かうための大きな安心感と勇気、希望をいただきました。二つ目に、ルーブリックで定義した資質・能力は、「総合探究」が軸となることについてです。演劇創作と未来創造探究が、各教科との往還を形作り、カリキュラム全体でルーブリックで示された資質・能力を育む。「探究」が、教育活動の中で各教科・科目から切り離され、「しかたがないからやる」といったどこか負担感を伴うものに陥りがちな状況に対し、新課程を見据えた探究のあるべき位置づけを具体的に示していただきました。地域課題解決の探究を核とした学校づくりで心掛けられた「ルール・ロール・ツール」は、教職員での共有化と具体的な実践を行う上で大変わかりやすく、即取り入れたいものでした。

新課程でのカリキュラム編成は？観点別評価は？など、個別の「どうする？」が話し合われても、それを統合する学校のグランドデザインが不明確であれば、生徒の成長のために実施するのではなく、「しかたがないからやっている」という状況に陥ってしまいます。いつくもの取り組むべき事項は、学校としてどういう生徒を育成したいのか？というビジョンに基づいて設定されるべきものであり、「個別に何とかすべきもの」ではない。改めてその意味について考えられる時間となりました。

その後、絡まった糸のほどき目は、緩んではまた締めりの繰り返しです。あちらがほどければ、こちらで絡まる。いつかすべてが緩んできれいになるかもしれませんが、完全にそうなる時は来なくても良いのかもしれない。このような糸の絡まりがあるからこそ、「対話」の時間が重要であり、何度も足を運びたく思うのだと思います。結局、南郷先生の回以降も、新たな絡まった糸の結び目が発見され「対話」に足を運んでいます。参加するとまた糸の結び目が新たに発見されるのですが、これが、南郷先生の話提供、そして毎週の対話から学んでいる事だと感じています。

本プロジェクトへの「ご参加希望」「校内での対話型研修会のご要望」等は、運営事務局 ベネッセ教育総合研究所 次世代の学び研究室(nextlearning@mail.benesse.co.jp)までご連絡ください。

本プロジェクトは、新型コロナウイルスの影響により全国の学校が休校せざるをえなかったことをきっかけに、有志により発足されました。プロジェクトでは、毎週行う学校教育活動に関する対話を通じて、「学校教育の革新と、生徒の気づきと学びの最大化」を目指しています。これまでに全国約100校から主に中高教員が参画しています。対話履歴はSNSでも発信しています。フォローください。[Twitter](#) [Facebook](#)